

今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』翻刻

共同研究

後藤 多津子・田中 司郎
塚本 泰造・原田 真理

(五十音順)

はじめに

宮崎県立図書館が船塚町(旧宮崎大学キャンパス跡)に新装なつて昭和六十三年に移転オープンされるにあたって、記念事業として「杉田文庫 俳諧資料展」が企画された。そのお手伝いをした縁で、同館史料調査研究室の岩切悦子主査から県内の二、三の国文学関係の文献資料の紹介をいただいたので、本稿ははじめに延岡市今山八幡宮に伝わる写本『建礼門院右京大夫集』を当短期大学国文学共同研究の対象にふさわしいものとして翻刻することとしたものである。

同文献資料としての解説は「解題」にゆずる。

国文科長 田尻 龍 正

解題

縦二三、五糎、横十七、八糎、列帖綴の冊子。^{注1}

五くくりからなり、一くくり目は二〇葉(表紙を含む)、二くくり

目は二〇葉、三くくり目は二三葉、四くくり目は二三葉、五くくり

目は一六葉で合計百二葉である。

現在の保存状態から判断すると、今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』^{注2}は、おそらく最初の綴糸が破損し(一・二・四のくくり)にのみ原糸が残っている)、前二くくりと後三くくりが別々にこよりで綴じられたと思われる。そのうちの前二くくりを一つにしたこよりは現在も残っているが、後三くくりを綴じたこよりは失われ、こより穴のみが存在する。現在は五くくりを一つにして、上下二箇所を木綿糸で綴じ直している。

現存する墨付は百一葉、一面九行書きである。和歌は詞書より二字分下げて二行にわたって書かれている。

奥書は百一葉目に、七行にわたって次のように記されている。

本云

建礼門院右京大夫集也

此本自筆なりけるを七条院大納言

さりかたきゆかりにて此さうしをみせ

られたりけるをうつされたるとなん

承明門院小宰相本以正元二年二月

二日書写畢

奥書の五行目までと、六・七行目の双方に出てくる「院」「門」の

字形に相違があること、墨質もほんのわずかだが違いがあるように思われることから、「承明門院小宰相本以正元二年二月二日書写畢」の部分、その前の五行とは別筆であると見てよいであろう。

また、今山八幡宮所蔵本には欠脱が七箇所ある。

欠脱はくくりの変わり目、及び、五くくり目に集中しており、その箇所は「追補」九三頁に記されている通りである。

次に、その欠脱箇所を本文における丁付で示す。

- 1 十九ウと二〇オの間（一くくり目と二くくり目の間）
- 2 四〇ウと四一オの間（二くくり目と三くくり目の間）
- 3 八六ウと八七オの間（四くくり目と五くくり目の間）
- 4 八七ウと八八オの間（五くくり目）
- 5 九〇ウと九一オの間（五くくり目）
- 6 九八ウと九九オの間（五くくり目）
- 7 一〇〇オ五行目（五くくり目）。「追補」に述べられているように、この箇所のみ1く6の欠脱とは性格を異にしており、△の符号をつけて欠脱であることを示している）

このうち2は、こよりで前後二つに分けられた箇所にかけている。このことから2の欠脱はこよりで綴じられた時期の前後に起きた可能性が強いと思われる。

4く7、つまり五くくり目に欠脱が多いことについては、最後の部分であるため散逸しやすかったものか、この部分だけ特に読まれる回数が多かったのか、いくつかの理由が考えられるが、詳細はわからない。

なお2の欠脱については、綴じ目に破れた紙の一部分が残っている。この点及び保存の状態から、今山八幡宮所蔵本は、表紙に「宝ノ第一号」と書いた小紙片が貼付されているものの、それ以前に多

くの人の手を経、しかも、「宝」とは程遠い扱いを受けた本ではないかと思われる。

「追補」に指摘される通り、今山八幡宮所蔵本は、本文上の欠陥をかなり多く有する伝本である。また他の諸本と比べると漢字表記、校合、書入れ、挿入等が多い。それらには数種の方法が認められ、この校訂が複数の人物によって時期を異にして行なわれたものであることをうかがわせる。

第320番と第321番の歌の間に詞書一行分の空白がある。九州大学図書館所蔵本（細川家旧蔵本）^{注3}にも同じあきの箇所があり、その他、漢字表記の仕方、平仮名のくずし方にも、酷似している部分がある。このことから今山八幡宮所蔵本と、九州大学図書館所蔵本に共通する祖本があると考えられる。

- 注1 井狩正司編著『建礼門院右京大夫集——校本及び総索引——』（笠間書院）の「追補」には、縦二四、二種、横一八種となっている。
- 注2 以下今山八幡宮所蔵本と記す。
- 注3 以下九州大学図書館所蔵本と記す。

凡 例

宮崎県延岡市今山八幡宮に宝物として保存されていた今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を底本とし、次の基準に従って翻刻した。

- 一 本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかって次の処置を施した。
- 1 仮名は現行の字体に統一した。
- 2 片仮名で書かれた「ハ」「ミ」「セ」などは平仮名扱いとした。

- 3 漢字は通行字体を用いた。
 - 4 反復記号は底本のままとした。
 - 5 底本の書き込みはすべて翻刻した。ミセケチには一点、二点、文字の上に点を施したものの、傍線で消したもの等があるが、翻刻では傍線でミセケチの箇所を示した。挿入は「○」で示した。
 - 6 参考として、九州大学図書館所蔵本との校異を脚注の形で示した。上が今山八幡宮所蔵本、下が九州大学図書館所蔵本の記載である。その際、今山八幡宮所蔵本は訂正前本文を用いた。ただし、欠脱箇所の校異については「追補」に記載があるので、1～7の番号を付すのみにとどめた。密着あるいは綴目のために判読不可能な箇所についても校異は省略した。
 - 7 損傷等により判読不能の部分は、字数分の□で、字数の分からない時には□で示した。
 - 8 六一ウから六二ウまでは密着してはがしがたい状態で一葉としてしか扱えない。しかし、読みとることのできる部分もあるので、もとの通り二葉分として読めるかぎり翻刻した。
 - 9 欠脱の箇所はへこの間欠脱ありで示した。
 - 10 一行分空白の箇所は、《一行分あき》で示した。
- 二 歌番号は、井狩正司編著『建礼門院右京大夫集——校本及び総索引——』と一致させた。

家の集なといひて歌よむ人こそかき歌うた

とゝむることなれ是はゆめくさきに是これ

はあらすたゝあわれにも悲しくもな
あわれあはれ
悲しくかなしく

にとすれはわすれかたくおほゆるこ
なく

とゝものあるをりくふと心におほ
そのイお

えしをおもひ出らるゝまゝに我めひ
出いて

とつに見んとて書をくなり
見み
書をくかきおく

1 われならてたれかあはれとみつっきのあ

ともしするの世につたはらは「オ

たか倉の院御位のころ承安四年など
たか倉たかくら

いひしとしにや正月一日中宮の御か

たへ内のうへわたらせ給へりしおほ

んひきなをしの御すかた宮の御物の

くめしたりし御さまなどのいつと申

なからめもあやにみえさせたまひし

をものゝとをりより見まいらせて心
見み
心こころ

におもひしこと

2 雲のうへにかゝる月日のひかりみる「身
ウ

のちきりさえうれしとそおもふ

をなし春宮なりしにや建春門院内裏
春宮春

にしりさふらはせをはしましゝかこ
はし
お

の御かたへいらせおはしまして八条

の二位との御まいりありしも御所に

さふらはせ給ひしを御くしけとのゝ
給ひ給

御うしろよりおつゝちとみまいら

せしかは女院むらさきのにほひの御

そやまふきの御うはきなくらの御二「うオ

ちきあをいろの御からきぬてふをい

ろくをにおりたりしをめしたりしい

ふかたなくめてたくわかくもおは

○す宮しはつほめるいろのこうはいのしおはすーおります

御そかはさくらの御うはきやなきの

御こうちきあか色の御からきぬみな

さくらををおりたるめしたりしにほひ

あひて今さらめつらしくいふかたな

くみえさせ給しにおほかたの御所の

御しニ「つらひ人らくのすかたまでこ

とにかゝやくはかりみえしおり心に

かくおほえし

3 春のはな秋の月夜をおなしをりみるこゝ

ちする雲のうへかな

頭中将さねむねのつねに中宮の御か

たへまいりてひはひきうたうたひあ

そひてときくことひけなといはれ

しをことさましにこそとのみ申てす

き三「しにあるをおりふみのやうにて

たゝかくかきておこせられたり

4 松風のひゝきもそへぬひとりことはさの

みつれなきねをやつくさむ

かへし

5 よのつねの松風ならはいかはかりあかぬ

しらつへににねもかはさまし

をおなし人の四月みあれの比ふちつほ

にまいりて物かたりせしをおり権亮これ

もりのとをりしをよひととめてこの

ほとにいつくにてまれ心とけてあそ

はむとおもふをかならず申さんなど 申さんー申さむ

いひ契て少将はとくたゝれにしかす

こしたちのきてみやらるゝほとに

たゝれたりしふたみへのいろこきなを ふたみーふたえ

しさしぬきはかへてのきぬそのころ

のひとへつねのことなれといろこと

にみえてけいこのすかたまことにゑ

物かたり四才いひたてたるやうにうつ

くしく見えしを中将あれかやうなる 見えーみえ

みさまと身をおもはゝいかに命もおを

しくて中くよしなからむなといひ

て

6 うらやましみと見る人のいかはかりなへ

てあふひをこゝろかくらん かくらんーかくらむ

たゝいまの御心のうちもさそあらん いまー今

かしといはるれは物のはしにかきて

さしいつ「四ッ

7 中く／＼に花のすかたはよそにみてあふひ みー見

とまてはかけしとそおもふ

といひたれはおほしめしはなつしも

ふかきかたにて心きよくやあるとわ

らはれしもさることゝおかしくそあ

りし古建春門院の御ために御てつか

ら御経かゝせおはしまして内裏にて

御八講おこなはれし五巻の日女院た

ち後のみや／＼三条女御との白河と

のなと「みな御ほう物たてまつらせ

五オ

給しそなたにゑんある殿上人もちて

まいりしけしきおもしろくもあはれ

にもありしに中宮の御ほう物は二枝

を宮のすけひら権亮これもりなともたれた

りしとおほゆこ女院いらせたまひて

おはしましゝかたをとりはらひて道

場にしつらはれたりしあはれにて

8 こゝのへにみのりの花のほふけふや」
五ウ

きえにし露もひかりそふらん

そふらんーそふらむ

近衛殿二位中将と申しころ隆房しけ ころー比

ひらこれもりすけもりなどの殿上人

なりしひきくせさせ給て白河とのゝ

肩

女はうたちさそひて所々の花御らん ターく

じけるとて又の比花の枝のなへてな 比一ひ

らぬを花みける人くの中よりとて

中宮の御かたへまいらせられたりし

かは「六オ

9 さそはれぬうさもわすれてひと枝の花に

そめつるくものうへ人

返事

隆房少将

10 雲のうへに色そへよとて一枝をおりつる

花のかひもあるかな

すけもりの少将

11 もろともにだつねてをみよ一枝の花に

こゝろのけにもうつらは

いつのとしにか月あかゝりし夜うへ

の「御ふえふかせおはしましゝかこ 六ウ
ふえーふえ

とにおもしろくきこえしをめてまひ

らすれはかたくなはしきほどなると

この御方にわたらせおはしましての

ちにかたりまいらせさせ給たりける

をそれはそらことを申そとおほせ事 そらことーそら事

あるとありしかは

12 さもこそはかすならすとも一すちに心を

さへもなきになすかな「七オ

とつふやくを大納言君と申しは三条

内大臣の御女とそきこえしその人か

く申と申させ給へはわらはせおはし

まして御あふきのはしにかきつけさ

せ給ひたりし

給ひー給

13 ふえたけのうきねをこそはおもひしれ人

ふえーふる

のころをなきにやはなす

なにとなくよみし歌の中に春たつ日

セウ

14 いつしかとこほりとけゆくみかはずゆく

すゑとをきけさのはつはな

るイ

15 春きぬとたれうくひすにつけつらむたけ

のふるすははるもしらしを

鶯有慶音

16 のとかなる春にあふよのうれしさはたけ

春ーはる

の中なるころゑのいろにも

対月待花

17 はやにほへ心をわけてよもすから月を

ハオ

みるにも花をしそおもふ

往事恋

18 あはれしりてたれかたつねんつれもなき

人をこひわひいわせなるとも

人ー人お

仙家卯花

19 露ふかき山路のきくをともしてうのは

山路ー山ち

なさへやちよもさくへき

かたおもひをはつるこひ

20 おきつなみいはうついでそのあわひかひ

ハウ

あわひーあはひ

ひろひわひぬる名こそおしけれ

くもるよの月

21 曇る夜をなかもあかしてこよひこそちさ 曇る夜―くもるよ

とにさゆる月をなかもれ

夕にすへる野の花

すへる―すくる

22 心をはおはなかそてにとめおきてこま

にまかする野辺のゆふくれ

たかひにつねにきく恋

23 ありときかれわれもきしもつらきか

な「たゝひとすちになきになしなて 九才

谷のへんのしか

24 たにふかみすきのこすゑをふく風に秋の

をしかそこゑかはすなる

ねさめのたう衣

25 うつおとにねさめの袖そぬれまざるころ を

もはなにのゆへとしらねと

名をかへてあふ恋

26 いとほれしうき名をさらにあらためて 九ウ

あひみるしもそつらさそひける

野亭夕の草 夏

27 ゆふされは夏野草のかたなひきすみ

かてらにやすむたひ人

連夜のくいな る

28 あれはてゝさすこともなきまきのとをな

にとよかれすたゝくくひなそ

たゝくくひなゝたゝくくひ
な

我にちきり人に契恋

32 契おきしほとはちかくやなりぬらんしつ

なりぬらんゝなりぬらむ
しつれゝしほれ

29 たのめおきしこよひはいかにまたれま

夜ふかきはるさめ

し」ところたかへのふみみさりせは
一〇オ

33 ふくるよのねさめさひしき袖のうへをお

春ゝはる
雨哉ゝあめかな

いなりの社の歌合

とにもぬらす春の雨哉

社頭朝鶯

とをきさはのはるこま

30 まろねしてかへるあしたのしめの中に心

34 はるかなる野さはあるゝはなれこまか

をそむるうくひすのこゑ
トイ

へさやみちのほともしるらん

しるらんゝしるらむ

松間夕花

くらきそらの帰かり」二一オ

31 いりひさすみねのさくらやさきぬらんま
さきぬらんゝさきぬらむ

35 はなをこそおもひもすてめありあけの月

つのだえまにたえぬしら雲

をもまたてかへるかりかね

日中恋」一〇ウ

あかつきのよふことり

36 夜をのこすねさめにたれをよふことり人

もこたへぬしのゝめの空

空一そら

山田のなはしろ

37 山里はかとたのおたのなはしろにやかて
山里一やまさと

かけひのみつまかせつゝ

ふるきいけのかきつはた「ニッ

38 あせにけるすかたのいけのかきつはたい

くむかしをかへたてきぬらん

名所のすみれ

39 おほつかなゝらひのおかのなのみしてひ

とりすみれの花そつゆけき

ところ／＼のやまふき

40 我やとのやえやまふきのゆふはへにゐて

のわたりもみるこゝちして

こゝち一心ち

うみのみちのはるのくれ「ニッ

41 いかりおろすなまみにしつむ入ひこそく

れゆく春のすかたなりけれ

春一はる

たきのへんのゝこりのゆき

42 こほりこそ春をしりけれたきつせのあた

りの雪はなをそのこれる

雪一ゆき

さわらひ

43 むらさきのちりはかりしておのつからと

ころ／＼にもゆるさわらひ

ふねのとまりの花「ニッ

44 高砂の尾上のはるをなかむれば花こそふ

高砂ーたかさこ
尾上ーおのえ

ねのとまり成けれ

成ーなり

45 ともふねも漕はなれゆくこゑすなりかす

漕ーこぎ

みふきとけよこの浦風

49 名にたかきおはすてやまのかひなれや月

まそてに雨はふりきて

雨ーあめ

月依所明

のひかりのことにみゆらん

みゆらんーみゆらむ

花落衣

せきをへたつる恋

46 さそひつる風は木すゑをすきぬなり花は

木すゑーこすゑ

50 こひわひてかくたまつきのもしのせき」い

一三ウ

たもとに散かゝりつゝ

散ーちり

つかこゆへき契なるらん

なるらんーなるらむ

老人を恋

山家初雪

47 つくもかみ恋ぬ人にもいにしへは」おも

二三オ

恋ぬーこひぬ

51 春の花秋の月にもおとらぬはみやまの里

里ーさと

かけにさへみえける物を

の雪のあけほの

雪ーゆき

雨中草花

さいはらによするこひ

48 すきてゆく人はつらしな花すゝきまねく

52 みし人はかれくになるあつまやにしけ

りのみするわすれ草哉

哉一かな

山家花をまつ

53

山里の花をそけなるこすゑより」ま一四オ 山里一やまさと

たぬあらしのおとそ物うき

中宮の御かたにさふらふ人をきんひ

らの中將のせちにいひしらふ物をの

みおもふよし返々うれへられしに秋

のはしめつかはしける

54

あきゝてはいとゝいかにかしくるらん色しくるらんしくるらむ

ふかけなる人のことの葉

かへし

55

時わかぬ袖のしくれに秋そひて」いかは一四ウ 秋一あき

かりなる色とかはしる

小松のおとゝの菊合をし給しに人に

かはりて

56

うつしうふるやとのあるしもこの花もと

もにおいせぬ秋そかさねん

をなしおとゝの大臣の大將にてよろお

こひ申し給しにおととうとの右大將御を

ともし給へりしいきおいゆゝしくみほひ

えしかは」五オ

57

いとゝしく咲そふ花のこすゑかな三笠の咲一さき

やまにえたをつらねて三笠一みかさ

いつれのとしやらん五せちのほと内としやらんとしやらむ

裏ちかき火の事ありてすてにあふな

かりしかは南殿にえうまうけて大将

をはしめて衛ふのつかさのけしきと

も心くにおもしろくみえしにおほ

かたの世のさはきもほかにはかゝる事

あらしとおほえしもわすれかたし」宮

一五ウ

は御手くるまにて行啓啓あるへしと

そ聞えし小松のおとゝ大将にてなを聞えきこえ

しにやおひて中宮の御方へまいり給

へりしことからなといみしうおほえ

き

58 雲のうへはもゆるけふりにたちさはく人

のけしきもめにとまるかな

やしまのおとゝとかやこのころ人はき

こゆめるその人の中納言と申し」比く

一六オ

しをこひ聞えたりしをたふとて紅の聞えきこえ

うすやうにあしわけを舟ふねむすひた

るくしさしたるかなのめ○ならぬにかなならぬなら

きてをしつけられたりし

59 あしわけのさはるをふねにくれなるのふ

かき心をよするとをしれ

かへししろきうすやうに書て書かき

60 あしわけて心よせけるおふをねともくれな

るふかきいろにてそしる」一六ウ

なにとなくみきくことに心うちやり

てすくしつゝなへての人のやうには

あらしとおもひしをあさゆふ女とち

のやうにましりゐてみかはす人あま

たありし中にとりわきてとかくいひ

しをあるふしきことやと人のことを

みきゝてもおもひしかと契とかやは

のかれかたくておもひのほかは物お

もはしきことそひてさまゝおもひ

みたれしころさとにて「はるかにに

一七〇

しのかたをなかめやるこすゑはゆふ

ひの色しつみてあはれなるにまたか

色いろ

きくらししくるゝを見るにも

見るゝみる

61 ゆふひうつるこすゑの色のしくるゝに心

もやかてかきくらすかな

秋の暮おましのあたりになきしきり 暮ゝくれ

くすのこゑなくなりてほかには聞 聞ゆるゝきこゆる

ゆるに

62 とこなるゝ枕のしたをふりすてゝ「あ 枕ゝまくら

一七〇

きをはしたふぎりくすかな

つねよりもおもふ事ある比をはなか

袖の露けきをなかめいたしつゝ

一七〇

63 露のおくおはなか袖をなかむれはたくふ

なみたそやかてこほるゝ

64 物おもへなけくとこイなれるなかめかなたの

めぬ秋のゆふくれの空

秋―あき

秋の月あかき夜

65 なにたかきふた夜のほかも秋はた一八オい

つもみかける月のいろかな

たちはなをみよとて人のつかはした

りしかへしに

66 心ありてみつとはなしにたちはなのには

ひをあやな袖にしめつる

かけはなれいくは一八オあなちにつらき

かきりにしもあらねと中くめにち

かきは又くやしくもうらめしくもさ

まくおもふことおほくてとしも帰 帰りかへり

り一八ウていつしか春のけしきもうらや 春―はる

ましう鶯のおとつる一八ウにも

67 もの思へは心の春もしらぬ身になにうく 思へ―おもへ

ひすのつけにきつらん 春―はる
きつらん―きつらむ

68 とにかくに心をさらすおもふこともさて

もとおもへはさらにこそおもへ

うせにしせうとのためにあみた経か

くにも

69 まよふへきやみもやかねて晴ぬらん一九オか 晴ぬらん―はれぬらむ

き一八ウおくもしの法のひかりに 法―り

内の御方の女坊宮房の御方の女坊車房の 車―くるま

あまたにて近しゆの上達部殿上人く

して花みあわれしはになやむことあり
あわれあはれ

てましらさりしを花の枝に紅のうす

やうに書て小侍従とそ

書かき

70 さそはれぬこゝろのほとはつられれとひ
こゝろ心

とりみるへき花のいろかは
みる見る

風のけありしによりてなれはかへ

し「一九ウ

〈この間欠脱あり〉

1

かへし

75 ふきわたる風につけても袖の露みたれそ

めにしことそくやしき

とかく物おもはせし人の殿上人なり

しころちゝおとゝの御ともにすみよ

しにまうてゝかへりてすはまのかた

むすひたるにかひともをいろくに

いれてわすれ草をおをきてむすひつけ
うへに はなたのうすやうに書て

られたりし「二〇オ

76 浦見てもかひしなればすみのえにおふ

てふくふさをたつねてそみる

かへし 秋のことなりしかはもみ

ちのうすやうに

77 住の江の草をは人の心にてわれそかひな 住すみ

き身をうらみぬる

大皇太后宮よりおもしろきゑともを

中宮の御かたへまいらせさせ給へリ 給へし給へりし

しなかにむかしてゝのもとに人二〇の

てならひしてとてことはかゝせしゑ

のましりたるいとあわれはにて
あわれあはれ

78 めくりきでみるにたもとをぬらすかなゑ

しまにとめしみつくきのあと

四月はかりしたしき人くして山里に

ありしころほとゝきすのつねになき

しに

79 宮こ人まつらん物をほとゝきすなきふる 宮こみやこ

しつるみやまへのさと二二オ

はなたちはなのあめはるゝ風にゝほ

ひしかは

80 たちはなの花こそいとゝかほるなれ風ま

せにふるあめの夕暮
夕暮ゆふくれ

五月五日宮の権大夫時忠のもとより

くすたままきたる箱のふたにしやう 箱はこ

ふのうすやうしきておなしうすやう

に書てなへてならすなかきねをまい 書かき

らせて二二ウ

81 君か代にひきくらふれはあやめくさなか

してふてふねもあかすそありける

かへし 花たちはなのうすやうにて

82 心さしふかくそみゆるあやめ草なかきた

めしにひけるねなれば

なげくことありてこもりあたりしこ

ろさうふのねをこせたる人に

83 あやめふく月日もおもひわかぬまにけふ

をいつかときみそしらする」二三オ

なりちかの大納言の女君の権亮これ

もりのうへなりし人はしかゆかりあ しかしる

りしもとよりくすたままおこすとて くすたままくすたま

84 きみにおもひふかき江にこそひきつれと

あやめの草のねこそあさけれ

返し

85 ひく人のなさけもふかき江におふるあや 江へえ

めそ袖にかけてかひある」三三テ 袖そて

すりのついでてならひに

86 哀なり身のうきにのみねをとめてたもと 哀あはれ

にかゝるあやめとおもへは

秋のすゑつかた建春門院いらせおは

しましてひさしくをなし御所なり九

月つくるあす還向あるへきに女官し

てあしてのしたゑのたんしにたてふ

みてくれなるのうすやうにて

87 かへりゆく秋にさきたつなこりこそ」を 三三オ

しむ心のかきりなりけれ

かへし^らへし^ろき菊のうすやうに書
らへう
書かき

てたれとしらねは女房のなかへとも

もりの中将のまいられしにことつく
ともりーともり

まことに世のけしきなごりをし^けに
まことにーまことに

うちしくれて物あはれなれと

88 立ちかへる名残をなにとをし^おむらんちと
立ちーたち
名残ーなごり

せのあきのゝとかなるよに

三位中将これもりのうへのもとよ

り「紅葉につけてあをもみちのうす
二三ツ

やうに

89 君ゆえは^へおしきのきはのもみちをもおし

からてこそかくた^きおりつれ

かへしくれなるのうすやうに

90 われゆへに君かおりける紅葉こそなへて

君ーきみ
紅葉ーもみち

の色にいろそへてみれ

たゝのりの朝臣のにし山の紅葉みた

るとてなへてならぬ枝をゝこせてむ

すひつけたる「二四オ

91 君におもひふかきみやまの紅葉をはあら

君ーきみ
紅葉ーもみち

しのひまにおりそしらする

かへし

92 おほつかなおりこそしらねたれにおもひ

ふかきみやまのもみちなるらん

なるらんーなるらむ

みくしけとのゝさとにひさしくおは

せしころ弁のとのゝその御さとへま

いりてかへりまいられたりしなとか

このたよりにもおとつれはせぬとの

た「まひしかは
二四ウ

93 なをさりにおもひしもせぬことの葉をか

せのたよりにいかゝちらさん

はる〇ころみやの西八条にいてさせ

給へりしほと大方にまいる人はさる

事にて御はらから御をいたちなとみ

なはんにおりて二三人はたえすさふ

らはれしに花のさかりに月あかゝり

し夜をたゝにやあかさんとして権亮ら

うゑいし「ふえふぎつねまさひはひ
二五オ

きみすのうちにもことかきあはせな

とおもしろくあそひしほとに内より

たかふさの少将の御ふみもちて参り
参りーまいり

たりしをやかてよひてさまくの事

ともつくしてのちにはむかし今の物

かたりなとしてあけかたまでなかも

しに花はちりちらすおなしにほひに

月もひとつにかすみあひつゝやう

くし「らん山むきはいつといひなか
二五ウ

らいふかたなくおもしろかりしを御

返し給てたかふさいてしにたゝにや

はとてあふきはしをおりてかきて

とらす

94 かくまてのなさけつくきておほかたに花

と月とをたゝ見ましたに

少将かたはらいたきまてゑいしすん すんしーすむし

してすゝりこひてこの座なる人く

なにともみなかけとてわかあふきに

かく「ニホオ」

95 かたくにわすらるましきこよひをはた

れも心にとめておもへ

権のすけはうたもえよまぬ物はいか

にといはれしを猶せめられて

96 心とむなおもひいてそといはんたにこよ

ひをいかゝやすくわすれん

つねまさの朝臣

97 嬉しくもこよひのとものかすにいりてし 嬉しくうれしく

のはれしのふつまとなるへき「ニホッ」

と申しをわれしもわきてしのはるへ

きことゝ心やりたるなどこの人く

のわらはれしかはいつかはさは申た

るとちむせしもおかしかりき又月の

まへの恋月のまへの祝といふことを

人のよませしに

98 ちよの秋すむへき空の月もなをこよひの 空ーそら

かけやためしなるらん

なるらん―なるらむ

99 つれもなき人そなきけもしらせける」ぬ

二七オ

れすは袖に月を見ましや

見―み

ゆかりある人のかせのおこりたるを

とふらひたりし返しに

100 なさけおく^をことの葉ことに身にしみて涙

の露そいとこほるゝ

ふくになりたる人とふらふとて

101 あはれともおもひしらなん君ゆへによそ 君―きみ

のなけきの露もふかきを

小松のおとゝうせ給てのちその北

の「かたのか^もと八十月はかりきこゆ

二七ウ

102 かきくらす夜^{よる}のあめにも色かはる袖のし 色―いろ

くれをおもひこそやれ

103 とまるらんふるき枕にちりはゐてはらは とまるらん―とまるらむ

ぬとこをおもひこそやれ

かへし

104 おとつる^をしくれは袖にあらそひてなく

くあかす夜半そかなしき

105 みかきこしたまのよとこにちりつみて」ふ

二八オ

るき枕をみるそかなしき

なりちかの大納言のとをき所へくた

られにし後院の京極との御も〇へ

後―のち
もへ―もとへ

106 いかはかりまくらのしたもこほるらんな 色ほるらん―こほるらむ

へてのそてもさゆるこの比

比一ころ

107 旅衣たちわかれにしあとの袖もろきなみ

たの露やひまなき

かへし

京極との「二ハッ

108 とこのうへも袖も涙のつらゝにてあかす

おもひのやるかたもなし

109

日にそえてあれゆくやとおもひやれ人 日一ひ

をしのふの露にやつれて

安元といひしはしめのとしの冬りむ

しのまつりに宮のうへの御つほねへ

のほらせ給御ともにまいる事ありて まいる一さはる

ままいらてさしも心にしむかへりたち

のみかくらもえみさりしくちをし」く 二九オ

て御すゝりのはこにうすやうのはし

に書つけておく をく

書一かき

110

あさくらやかかへすくそうらみつるかさ

しの花のおりしらぬ身を

さとなりし女坊房のふちつほの御まへ

のもみちゆかしきよし申たりしをち

りすきにしかはむすひたる紅葉をつ

かはす枝にかきつく

111

ふく風も枝にのとけき御代なれは」ちら 二九ウ

ぬもみちの色をこそみれ

色一いろ

宮の六はらとのにしはしいてさせ給

ていらせ給し行けいのいたしくるま

にまいりたりし人のその夜の月おも

しろかりしをとう花殿のかたなとに

て人くくして見てそのあか月い

てつとめてよへの月に心はさなか

らとまりてと申たりしかは

112

雲のうへをいそきいてにし月なれはほ
三〇オ

かにこゝろはすむとしりにき

兼光の中納言のしきしなりしころむ
ころー比

くを六つゝみておをこせたるにいかゝ

いふへきとはりまの内侍のいはれし

かは

113

むつのみちをいとふ心のむくひにはほと

けのくにゝゆかさらめやは

雪のふかくつもりたりしあしたさと

にてあれたる庭をみいたしてけふこ

ん人をとなかめつゝうすやなき三〇ウの

きぬこうはいのうすきぬなときてゐ

たりしにかれのゝおをり物のかりきぬ

すはうのきぬむらさきをのおり物のさ

しぬきゝてたゝひきあけていりきた

りし人のおもかけわかありさまには

にすいとなまめかしくみえしなとつ

ねはわすれかたかくおほえてとし月お

ほくつもりぬれは心にはちかきも
つもりぬれは—つもりぬれ
と

返々むつかし」三三〇

114 とし月のつもりはてゝもそのおりの雪の

あしたはなをそこひしき

こひしき—恋しき

山さとなるどころにありしをりえむ

えむ—えん

なるありあけにおきいてゝまつちか

きすいかいにさきたりしあさかほを

たゝ時のまのさかりこそあわれなれ

あわれ—あはれ

とてみし事もたゝ今の心ちするを人

心ち—心地

をも花はけにさこそおもひけめなへ

て〇な^はかきためしにあらさり」ける

なかき—はかなき

などおもひつゝ^くけらるることのみさ

ま／＼なり

115 身のうへをけにしらてこそあさかほの花

をほとなき物といひけめ

116 ありあけの月にあさかほみしをりもわす

れかたきをいかてわすれん

せうとなりしほうしのことたのみ

たりしか山^{ふかく}なくおこなひてみやこへ

なく—ふかく

もいてさりし比雪のふりしに」三三〇

117 いかはかり山路の雪のふかゝらんみやこ

のそらもかきくらすころ

冬の夜月あかきに賀茂にまうてゝ

118 神かきや松のあらしもおとさえて霜にし

もしく冬の夜のつき

人の心のおもふやうにもなかりしか

はすへてしられすしらぬむかしにな

しはてゝあらんなど思ひし比

119 つねよりもおもかけにたつゆふへかな三三三今

やかきりとおもひなるにも

120 よしさらはさてやまはやとおもふより心

よはさのまたまさるかな

おく世をイとかく
をなし事をよくおもひて月のあかき

夜はしつかだになかめたるにむら 夜一ナシ

雲はるゝにやとみゆるにも

121 みるまゝに雲ははれゆく月かけも心に

かゝる人ゆえトになを

いとひさしくおとつれざりし比夜ふ三三三か

くねさめてとかく物をおもふニおほ

えす涙やこほれすニけむつとめてみれ こそほれすこそほれに

ははあなたのうすやうのまくらのこと

のほかにかへりたれば

122 うつりかもおつる涙にすゝかれてかたみ

にすへき色たにもなし

心ならず宮にまいらすなりにしころ

れいの月をなかめてあかすにみても

あかざりし御おもかけのあさまし三三三く

かくてもへにけりとかきくらし恋し

くおもひまいらせて

123 こひわふる心をやみにくらませて秋のみ 秋ーあき

やまに月はすむらん

その比ちより積つたることをひかておほ 比ーころ 積ーつもり

くの月日へにけりとみるも哀あはれにて宮

にてつねにちかくさふらふ人のふえ

にあはせなとあそひし事いみしうこ

ひし三四

124 おりくのそのふえたけのおとたへてす ふえーふる

さひしことのゆくゑしられす

みやの御産なとめてたく聞きまいらせ

しにも涙をともにてすくるに皇子む

まれさせおをはしまして春宮たちなど

きこえしにも思ひつゝけられし

125 雲のよそにきくそかなしきむかしならば むかしー昔

たちましらまし春のみやこそ

となりに庭火えのふえおとするにも三四

こと内侍所としくのみかくらにこれもりの

少将みちいやすたかの中將おなどのをもしろ

かりしねともまつおもひいてらる

126 きくからにいとゝむかしのこひしくてに

はひのふえのねにそなくなる ふえーふる

おほやけの御かしこまりにてとをく

ゆく人そこくによへはとまるなど

きゝしかはそのゆかりある人のもと

へ

127 ふしなれぬ野路のしのはらいかならむ」お

三五オ

もひやるたに露けき物を

しりたる人のさまかへたるかこんと

いひてお^をともせぬに

128 たのめつゝこぬいつはりの積るかなまこ 積る―つもる

とのみちにいりし人さえ^ト

すひつのはたにこゝきに水のいりた

るかありけるに月のさし入てうつり

たるわりなくて

129 めつらしや月に月こそやとりけれ」雲井

三五ウ

の空^{にイ}よたちなかくしそ

何事もへたてなくと申契たりし人の

もとへおもひのほかにも身のおもひそ

ひてのちさすかにかくこそとも又き

こえにくきをいかにもきゝ給らんと

おほえしかは

130 夏衣ひとへにたのむかひもなくへたてけ 夏―なつ

りとはおもはさらなん

おもはさらなん―おもはさ
らなむ

131 さきの世のちきりにまつるならひをも」 ちきり―契

三六オ

まつる―まくる

きみはさすかにおもひしならん

ならん―ならむ

はしめつかたはなへてあることゝも

おほえすいみしう物のつゝましくて

あさゆふみるはすかたへの人くも みるはすーみかひす

ましておとこたちもしられなはいか

にとのみかなしくおほえしかはてな

らひにせられしは

132 ちらすなよちらさはいかゝつらからんし

のふのやまにしのふことの葉三六ウ

133 恋路にはまよひいらしとおもひしをうき

契にもひかれぬるかな

134 いくよしもあらしとおもふかたにのみな

くさむれともなをそかなしき

そのかみおもひかけぬところにてよ

人よりも実家宰相中将とそいろいろこのむときく人よし

あるあまと物かたりしつゝ夜もふけ

ぬるにちかく人のあるけはひのしる

かりけるにや比はうつきの十日なり

けるに月三七オのひかりもほのくゝにて

けしきみえみえしなといひて人につた

えてへそのおとこはなにかしの宰相宰中

将とそ

135 おもひわくかたもなきさによるなみのい

とかく袖をぬらすへしやは

と申たりしかへし

136 おもひわかてなにとなきさのなみならば

ぬるらん袖のゆへもあらしを

ぬるらんーぬるらむ

137

もしほくむあまの袖にそ奥津なみ「心を 奥津―おきつ
三七ウ

よせてくたくとはみし

又返し

138

きみにのみわきて心よるなみはあまの

いそやにたちもとまらす

そゝろきくさなりしをついてにてま

〇としく申わたりしかとよのつねの

ありさまはすへてあらしとのみおも

ひしかは心つよくてすきしをこのお

おもひのほる―おもひの
ほか

もひのほるなることをはやいとよ

うきくけ「りきてそのよしほのめか

三八オ

して

139

浦やましいかなる風のなさけにてたくも

のけふりうちなひきけん

かへし

140

きえぬへきけふりのすゑはうらかせにな

ひきもせずたゝよふ物を

またおなしことをいひて

141

あはれのみふかくかくへき我おゝきてた

れに心をかはすなるらん「三八ウ

なるらん―なるらむ

かへし

142

人わかす哀をかはすあた人になさけしり 哀―あはれ

てもみえしとそおもふ

まつりの日をなし人

143 ゆくするを神にかけてもいのるかなあふ

ひてふなをあらましにして

かへし

144 もろかつらその名をかけていのるとも神

のころにうけしとそおもふ三九オ

かやうにて何事もきてあらて返々く

やしきことをおもひし比

145 こえぬれはくやしかりけるあふさかをな

にゆえトにかはふみはしめけん

はしめけんーはしめけむ

車をこせつゝ人のもとへゆきなとせ

しにぬしつよくきたまるへしなとき

きし比なれぬる枕にすゝりのみえしききーきゝ

をひきよせてかきつくる

146 たれか香におもひうつるとわするなよ三九ウ

なくなれしまくらはかりは

返てのちみつたりけるとてやかて

あれより

147 心にも袖にもとまるうつり香をまくらに

のみやちきりおおくへき

をおなし比よとこにてほとゝきすを

きゝたりしにひとりねさめに又かは

らぬこゑにてすきしをそのつとめてこゑーゑ

ふみのありしついでに四十オ

148 もろともにことかたらひしあけほのにか

はらざりつるほとゝきすかな

かへしにわれしもおもひいつるをな

とさしもあらしとおほゆることとも

をいひて

149 おもひいてゝねさめしとこのあはれをも

ゆきてつけゝるほとゝきすかな

またしらしおとせてふみのこまはをく
しらしーしはし

とありしかへしになとやらんいたく

心の「四〇」

へこの間欠脱あり

2

みゆらん夢におもひあはせよ

みゆらんーみゆらむ

かへし

154 けにもその心のほとやみえつらんゆめに
みえつらんーみえつらむ

もつらぎけしきなりつる

人の女をいふ人に五月すきてと契け

るを心いられしてしのひていりにけ

りときく人のもとへ人にかはりて

155 みな月をまでとちきりしわか草をむすひ

そめぬときくはまことか「四一」

せんなきことをのみおもふころいか

てかかゝらすもかなとおもへとかひ

なきこゝろうへて

こゝろー心
うへーうく

156 おもひかへすみちをしらはや恋のやまは

やましけやまわけいりし身に

いつかたにか経のこゑほのかにきこ

えたるもいたく世の中しみくと物

かなしくおほえて

157

まよひいりし恋路くやしきおりにしも」す

四一ウ

恋路—こひち

ゝめかほなるのりのこゑかな

ちゝおとゝの御供に熊野へまいると

御供—御とも
熊野—くまの

きゝしをかへりてもしり^{はし}をとなければ

しり—しはし

158

わするとはきくともいかゝみくまのゝ浦

のはまゆふうらみかさねん

とおもふもいと人わろしひとゝせな

にはのかたより帰てはやかておとつ^を

れたりし物をなとおほえて

159

おきつなみかへればおと^をはせし物をい

四二オ

かなる袖のうらによるらん

よるらん—よるらむ

つねにむかひたるかたは常葉木とも

木くらうもりのやうにてそらもあき

らかにみえぬもなくさむかたなし

160

なかむへき空もさたかにみえぬまでしけ 空—そら

きなけきもかなしかりけり

ひんかしは長楽寺の山のうへみやら

れたるにしたしかりし人とかくせし

山のみねそとはのみゆるも哀なるに 哀—あはれ

なか「めいたせはやかてかきくらし

四二ウ

て山もみえす雲のおほいたるもいた

く物かなし

161

なかめいつるそなたの山の木すゑさへ

たゝともすれはかきくもるらん

くもるらんくもるらん

雲のうへもかけはなれそのゝちもな

をときくおとつれし人をもたのむ

としはなけれどさすかにむさじあふ

みとかやにてすくるに中くあちき

なき事のみまさればあらぬ世の心ち

して心みん^{四三}とてほかへまかるには

うくどもとりしたゝむるにいかなら

いかならんいかならむ

ん世までもたゆむましきよし返く

いひたることの葉のはしにかきつけ

し

162

なかれてとたのめし^{カイ}こともみつ^キきのか

きたえぬへきあとのかなしさ

宮にさふらふ人のつねにいひかはす

かきてもその人はこのころはいかに

といひたりし返事^{四三}のつゐてに^{四三}

つゐてつゐて

163

雲のうへをよそになりにしうき身にはふ

きかふかせのおともきこえず

治承などの比なりしにやとよのあか

りの比上^房西門院女坊物見^{二車}に子くるま^比ころ

はかりにてまいられたりしとりく

にみえし中に小宰相とのいひし人

のひむひたひのかゝりまでことにめ ひむひたひーひんひたひ

とまりしをとしころ心かけていひけ

る人の道盛の朝臣にとられてなけく 道盛ーみちもり

ときゝし「けにおもふもことはりと 四四オ

おほえしかはその人のもとへ

164 さこそけに君なけくらめ心そめし山のも

みちを人におられて

かへし

165 なにかけに人のおりけるもみち葉をこゝ

ろうつしておもひそめけん

なと申しおりはたゝあたことゝこそ

おもひしをそれゆへそこのもくつと

まで「なりしをあわれのためしなさ トイ あわれーあはれ 四四ウ

はよそにてなけきし人におられなま

しかはさはあらさらまし返くため

しなかりける契のふかさもいはんか

たなし大方の身のやうもつくかたな

きにそへて心の中もいつとなく物の

みかなしくてなかめし比秋にもやゝ

なりぬ風のおとは を さらぬたに身にし

むにたとえんかたなくなかめられて

ほしあひの空みるも「物のみあはれ 空ーそら 四五オ

なり

166 つくくとなかめすくしてほしあひのそ

らをかはらすなかめつるかな

にしやまなる所にすみし比身のいと

まなさにことつけてやひさしくおと^を

もせず^{無イ}かれたる花のありしにふと

167 とはれぬはいくかそとたにかそへぬに花

のすかたそしらせかほなる

この花は十日あまりかほとにみえし

に「おりてもたりし枝をすたれにさ^{四五ウ}

していてにしなりけり

168 あはれにもくらくも物そおもはるゝのか

れさりけるよゝの契に

まへなるかきほにくすはひかゝりこ

さゝうちなひくに

169 山さとはたまゝくゝすのうら見えてこ^{むれはイ}見え^{にイ}見へ

さゝかはらに秋のはつかせ

月の夜れいのおもひいですもなく

て^{四六オ}

170 おもかけを心にこめてなかむれはしのひ

かたくもすめる月かな

冬になりてかれのゝおきに時雨はし

たなくすきてぬれいろのすさまじき

にはるよりさきにしためくみたるわ

か葉のろくしやう色なるかときく

みえたるに露は秋思ひいてられてお^を

きわたりたり

171 霜さゆるかれのゝおきのつゆのいろ「秋 秋ーあき

四六ウ

のなごりをともにしのふや

なにとなくねやのさむしろうちはら

ひつゝおもふことのみあれは

172 ゆふされはあらましことのおもかけに枕

のちりをうちはらひつゝ

173 あくかるゝ心はひとにそひぬらん身のう そひぬらんーそひぬらむ

さのみそやるかたもなき

宮にさふらひしまさよりの中納言の

女輔とのといひしか物いひおかし

く「にくからぬさまにてなに事も申 四七ナ

かほし^{かは}なとせしか秋ころ山さとにて 申かほしー申かはし

ゆあふるとてひさしくこもりゐられ ゆあふるーゆあむる

たりしにことをつゐてに申つかはす つゐてーつゐて

174 まし葉ふくねやのいたまにもる月を霜と

やはらふあきのやまさと

175 珍しくわかおもひやるしかのねをあくま 珍しくーめつらしく

てきくや秋の山里 秋ーあき
山里ーやまさと

176 いとゝしく露^をやおきそふかきくらし「雨 雨ーあめ
四七ウ

ふるころの秋のやまさと 秋ーあき

177 うらやましほ^{櫛木}たきゝりくへいかはかりみ

ゆわかすらむあきのやまさと

178 しるひろふしつもみちにやまよふらんき

りたちこむるあきのやまさと

179 くりもゑみおかしかるらんとおもふにも

いてやゆかしや秋の山さと

秋―あき
山さと―やまさと

180 心さしなじはさりともわかためにあるら

む物をあきのやまさと「四八オ

181 このころはかうしたちはななりましり木
木の葉―この葉

の葉もみつやあきのやまさと

182 鶉ふすかとたのなるこひきなれてかへり
鶉―うつら

うきにやあきの山さと
山さと―やまさと

183 かへりきてそのみかはかりかたらなんゆ

かしかりつる秋の山さと

秋―あき
山さと―やまさと

かへしもたはふれことのやうなりし

をほとべてわすれぬ冬ふかきころわ

つかに霜かれの菊の中にあたらし

く「さきたる花をおりてゆかりある人

四八ウ

のつかさめしになけくことありしか

いひお^をごせたりし

184 霜かれのしたえ^えにさけるきくみれは我ゆ

くすゑもたのもしきかな

と申たる返しに

185 はなといへはうつろふ色もあたるをき

みかにほひはひさしかるへし

上らうたちてちかくさふらひし人

の「とりわき中よぎやうなりしにわか

四九オ

物申人のこのかみなりしは御ゆかり

のうへにやかてみや人にてことにつ

ねにかし^{みえ}人しのひて心かはしてかた

みにおもひあはぬにしもあらしと見

えしかと世のならひにて女かたは物

をもはしけなりしをま^ほをなら

ねと心えたりしかはちとけしきしらま

ほしくておとこのか^もとへつかはず「四九ウ

186 よそにても契あはれにみる人をつらきめ

みせはいかにうからん

187 立かへる名残こそとはいはずとも枕もい

かに君をまつらん

立かへる―たちかへる
名残―なこり

君―きみ

188 おきてゆく人のなこりやをしあけの月か

けしろし道芝の露

道芝―みちし葉

返しあひなのさかしらやさるはかや

うのこともつきなき身にはこと葉も

なきをとて「五〇オ

189 わかおもひ人のこゝろをおし^をはかりなに

とさまくきみなけくらむ

190 枕にも人にもこゝろおもひつけてなこり

よなにときみそいひなす

191 あけかたの月をたもとにやとしつゝかへ

さの袖は我そつゆけき

宮のまうのほらせ給御ともしてかへ

りたる人々物かたりせしほとに火も
ターく

きえぬれとすひつのうつみ火は「か
五〇ウ
うつみ火ーうつみひ

りかきおこしておなし心なるすち四

人はかりさまく心のうちともかた

へはのこさすなといひしかとおもひ

くにしたむせふことはまほにもい
おもひくー思ひく

ひやらぬしも我心にもしられつゝあ

われにそおほえ給し
あわれーあはれ
給しーし

192 おもふとち夜半のうつみ火かきをこしや

みのうつゝにまとるを〇する
まとるをーまとるをそ

193 たれもその心のそこはかすく「いひ
五一オ

はてねともしるくそありける

なとおもひつゝくるほとに宮のすけ

のうちの御かたの番に候けるとて
さまらひイ

いりきてれいのあたこともまとしき

事もさまくおかしきやうにいひて
事ーこと

我も人もなのめならすわらひつゝは

てはおそろしき物かたりともをして

おとされしかはまめやかにみなあせ

になりつゝいまはきかしのちにとい
いまー今

ひし「かと猶くいはれしかははて
五一ウ

はきぬをびきかつきてきかしとてね

てのちに心におもふ事

194 あたことにたゝいふ人の物かたりそれた

にこゝろまとひぬるかな

195 おにをけにみぬたにいたくおそろしきに

後の世をこそおもひしりぬれ

此人もよしなしことをいひて草のゆ 此この

かりをなにかおもひはなつたを^お

な^一し事とおもへと常にいはれしかは 常^一つね

五二オ

196 ぬれそめし袖たにあるをおなし野^ノ露を

はさのみいかゝわくへき

おほかたはにくからすいひかはして

はてまでもかやうにたにもあらんと

いはれしかは

あらん^一あらむ

197 わすれしの契たかはぬ世なりせはたのみ

やせまし君かひとこと

いつもを^おなしことをのみ返々おもひ

てあ^一はれくわか心に物をわすれ

五二ウ

はやとつねはおもふかかひなければ

198 さることのありしかとたにおもはしを^お

もひけてともけたれさりけり

なにとなきことを我も人もいひしを^お

りおもはぬ物のいひはつしをしてそ

れをよく^{とかく}いはれしも後におもへはあ

はれにかなしくて

199 なにとなくことの葉ことにみゝとめて^一

五三オ

うらみしこともわすられぬかな

母なる人のさまかへてうせにしか

ことに心さしふかくて人にもいひ

おき^きなとせられし五月のはしめな

くなりにしのはよろつおもふは

かりなくてあかしくらしゝに四十

九日にもなりてきられ^{なり}のし衣けさ
きられしーきられたりし

なとゝりいてゝこもり僧にとらせ

あせう上人にたてまつりなとせ^せし

にきぬのじわ^はまでも「きたりしお
五三ツ

りにかはらておもかけいとゝすゝ

むかなしさに

200 きなれける衣の袖のおりめまたゝその

人を見る心ちして

おもひなしもいとゝ心ほそくかなし

き事のみまさりて

201 あはれてふ人もなき世にのこりゐていか

になるへき我身なるらん

なるらんーなるらむ

高倉院かくれさせおはしましぬと

き^ま「きしころみなれことし世の事か
五四オ

すかすにおほえておよはぬ御事なか
かすかすーかすく

らもかきりなくかなしくな^まに事もけ

にすゑの世にあまりたる御事にやと

人の中^申にも

中にもー申にも

202 雲のうへにゆくすゑとをくみし月のひか

りきえぬと聞そかなしき

聞きく

中宮の御心のうちをしはかりまいらせことに

ことに—ことて

いかはかりかとかなし五四ウ

203 かけならへてるひのひかりかくれつゝひ

とりや月のかきくもるらん

くもるらん—くもるらむ

す寿永元曆などの比世のさはきは夢と

比—ころ

もまほろしともあはれともなにとも

すへてくいふへきゝはにもなかり

しかはよろついかなりしとたにおも

ひわかれす中くおもひもいてしと

のみそ今までもおほゆるみし人く

のみやこわかるときゝし秋さまの事

とかくいひてもお五五オもひても心もこ

とはもおよはれすまことのきはゝ我

も人も兼ていつともしる人なかりし 兼て—かねて

かはたゝいはんかたなき夢とのみそ

ちかくもとをくもみ聞人みなまよは 聞—きく

れしおほかたの世さはかく心ほそ

きやうにきこえしころなどは蔵人頭

にてことに心のひまなけなりしうへ

あたりなりし人もあひなき事なりな

といふこともありてさらに五五ウ「又あり

しよりけにしひなとしておのつか

らとかくためらひてそ物いひなとせ

しをりおくもたゝおほかたのことく

さもかゝる世のさはきになりぬれば

はかなきかすにならん事はうたかひ
ならんならむ

なきことなりさらはさすかに露はか

りのあはれはかけてんやたとひなに

ともおもはずともかやうにきこえな

れてもとし月といふはかりに成ぬる
成なり

情にみち五六オのひかりもかならすおも
情なきけ

ひやれ又もし命たとひいましはしな

とありともすへては今は心をむかし
すへてはすへて

の身とおもはしとおもひしたゝめ

てなんあるそのゆへは物をあはれと

もなにのなこりその人の事なおも
事こと

ひたちなはおもふかきりもおよふま

し心よはさもいかなるへしとも身な

からおほえねはなに事も思ひすてゝ
思ひおもひ

人のもとへさてもなといひてふみ五六ウや

ることなともいつくの浦よりもせし

とおもひとりたる身とおもひちたる
おもひたるおもひよりた
る

をなをさりにてきこえぬなとなおほ

しそよろつたゝいまより身をかへた
いま今

る身と思ひなりぬるをなをとすれ
思ひおもひ

はもとの心になりぬへきなんいとく

ちをしきといひしことのけにさる事

と聞しもなにとかいはれんなみたの 聞ききき

ほかはこの葉もなかりしをつるに つるにつついに

秋のはしめつ五七オ「かたの夢のうちの夢

をきし心ちなにかはたとへんさ

すか心あるかきりこのあはれをいひ

おもはぬ人はなれとかつみる人

くもわか心のともはたれかはあら あらんああらむ

んとおほえしかは人にも物もいはれ

すつくくとおもひつくけてむねに

もあまればほとけにむかひたてまつ

りてなきくらすほかの事なしされと

実命はかきりあるのみにあらずさま 実まけに

か「ふる事たにも〇心身をおもふやうににまかせてひ 五七ウ

とりはしりいてなんとはえせぬまま

にさてあらるか心うくて

204 まためしたくひもしらぬうきことをみ

てもさてある身そうとましき

いはんかたなき心ちにて秋ふかくな

りゆくけしきにましてたへてあるへ

き心ちこもせず月のあかき夜そらの 心ちもこ心ちにも

けしき雲のたをすまひ風のおとこと

にかなしきをなかめつ行急もな 行急ゆく急

五八オ

きたひの空いかなる心ちならんとの 空そら

みかきくらさる

205 いくつにていかなることをおもひつゝこ

よひの月に袖しほるらん

しほるらんしほるらむ

夜のあけひのくれなに事をみきくに

もかたときおもひたゆむ事はいかに

してかあらんされはいかにしてかせ

あらんーあらむ

めて今いちともかなふまじきかなし

さ「こゝかしことうちたちたるさま

五八ウ

なとつたへきくもすへていふへきか

たそなき

206 いはゝやとおもふことのみおほかるもさ

てむなしくやつるに果なむ

つゐにーついに
果ーはて

を^おそろしき物のふともいくらもくた

るなにかときけはいかなる事をいつ

きかんとかなしく心うくなくくね

たる夢につねにみしまゝのなをしす

かたにて風の夥敷ふく所にいと物お 夥敷ーおひたゝしく

も「はしけにうちなかめてあるとみ

五九オ

てさはく心にさめたる心ちいふへき

かたなし唯今もけにさてもやあるら

唯今ーたゝ今
あるらんーあるらむ

んとおもひやられて

207 なみ風のあらきさはきにたゝよひでさこ

そはやすきそらなかるらめ

あまりきはきし心ちのなごりにやし

りし身もぬるみて心地も侘しければ
心地ー心ち
侘しーわひし

さらはなくなりなはやとおほゆ」^{五九ウ}

208

浮うへのなをうきことをきかぬさ

□ □

浮うへーうきうへ
□ □ □ーきにこ

□の世のほかになりもしなはや

とおもへときもなきつれなき心うし

209

あらるへき心ちもせぬになをきへてけふ^{たえ}

までふるそかなしかりける

かへるとしのはるゆかりある人の物

まいりすとてさそひしかはなに事も

物うけれとたうときかたのことなれ

はおもひを^をこして参りぬかへさに 参りーまいり

梅の花「なへてならすおもしろき所 花ーはな

六〇オ

ありとて人のたち入しかはくせられ

て行たるに誠に尋常ならぬ花のけし

行ーゆき
誠ーまこと
尋常ーよのつね

きなりその所のあるしなるひしりの

人に物いふをきけはとしくこの花

をしめゆひてこひたまひし人なくて

ことはいたつらにさきちり待あわ^は
あわれーあはれ

れにといふをたれそとふめれはそ

の人としもたしかなる名をいふにか

き □ しき心のうちに」
六〇ウ □ーみたれかな

210

思ふこと心のまゝにかたらはむなれける 思ふーおもふ

人を花もしのはゝ

そのはるあさましくを^おそろしくきこ

えしことゝもにちかくみし人くむ

なしくなりたるかすおほくてあらぬ

すかたにわたさるゝなにかと心うく

いはんかたなくきこえてたれくくな

と人のいひしもためしなくて六一オ

これはまことかなをも 一あはれされは

たゝ こそおほゆれ 一夢にやあらんと

のうき身になり 一しけひらの三位

えしころ 人くの中 中將 一てみやこにしは

ことをいひ 六一ウ しとき 一ことにくむか しちかゝりし 一にもあさゆふな れておかしき

密着のため六一オ読むこと不可能

いつれ すくれたり 一もいまのちをみ きくにもけに 一しなとおもひ てらるゝ

あたりなれとき かたちよ 一はことにありか たかりし

うぬまこと みる中にため 一にむかし今

しもな れはおりにくには 一かりしそかしさ

めてぬ人 法住寺殿の御賀 一やはありし

にせいはいは おりなどは 一まひての

光源氏のためし 帖移り綴目のため一行判読不能 六一ウ

花のにほひもけにけをされぬへくな

ときこえしそかしそのおもかけはさ

ることにてみなれしあはれいつれか

といひなかなをことにおほゆをな お

しことゝおもへとおりくはいはれ

じをさこそといらへしかはされとさ

やはあるといはれし事なとかすく

かなしともいふはかりなし

214 春の花の色によそへし俤のむなしきなみ 俤—おもかけ

のしたにくちぬる」六三オ

215 悲しくもかゝるうきめをみくまのゝ浦わ 悲しく—かなしく

のなみに身をしつめける

ことにおなしゆかりはおもひとりるか

たのつよかりけるうきことはさなれ

ともこの三位中将きよつねの中将にト 中将に—中将と

心とかくなりぬるなとさまく人の

いひあつかふにも残りていかに心よ 残り—のこり

はくやいとゝおほゆるんなとさま

くおもへとかねていひしことにて

やまたなにとか「おもふらんなたより

六三ウ

につけて とつもきかす —こと葉ひ

たゝみやこいてゝの冬わつかなるた

よりにつけて申しやうに今は身をか

へたるとおもふをたれもさ思ひて後

の世をとへとはかりありしかはたし

かなるたよりもしらすわさとは又か

なはてこれよりもいふかたなくおも

ひやらるゝ心のうちをもえいひやら え

ぬにこのゆかりのくさはかくのみみ

なき「きしころしもあたらぬたよ きき—きゝ

六四オ

りにてたしかにつたふへきことあり くー々

しかは返くかくまでもきこえしと

おもへとなといひて

216 さま／＼に心乱でもしほ草かきあつむへ 乱ーみたれ

き心ちたにせず

217 を^おなし世となをおもふこそかなしけれあ

るかあるにもあらぬこの世に

このはらからたちの事なと □ □ □ □ーいひ

て「六四ウ」

218 思ふことをおもひやるにそ思ひくたくお

思ふーおもふ
思ひーおもひ

もひにそへていとかなしき

など申たりし返事さすかにうれしき

よしいひて今はたゝ身のうへもけふ

あすの事なれば返々おもひとちめぬ

る心ちにてなんまめやかにこのたひ

はかりそ申もすへきとて

219 おもひとちめおもひきりても立かへりさ おもひきりー思ひきり
立ーたち

すかにおもふ事そおほかる「六五オ」

220 今はすへてなにのなさけもあはれをもみ

もせしきゝもせしとこそおもへ

さきたちぬる人／＼のこといひて

221 あるほとかあるにもあらぬうちになをか

くうきことをみるそかなしき

とありしをみし心ちましていふかた

なし又のとしの春そまことにこの世

のほかなきはてにしそのほと的事

はまして何とかはいはんみな兼て思

何一なに
兼て一かねて
思ひ一おもひ

ひし事なれとたほれくとのみ

六五ウ

おほゆあまりにせきやらぬ涙もかつ

はみる人もつましければなにとか

人もおもふらめと心ちのわひしきと

てひきかつきねくらしてのみそ心の

ひきかつ一ひきかつき

まになきすくすいかて物をもわす

れんとおもへとあやにくにおもかけ

る身はにそひことの葉ことにきく心ち

心ち一心地

して身をせめてかなしき事いひ尽す

尽す一つくす

へき方なし」たかきりある命にて

六六オ

はかなくなときしことをたにこそ

かなしきことにいひおもへこれはな

にをかためしにせむと返くおほえ

せむ一せん
く一々

て

222 なへて世のはかなきことをかなしとは

かゝる夢みぬ人やいひけん

ほとへて人のもとよりさてもこのあ

はれいかはかりかといひたればなへ

ての事のやうにおほえて」六六ウ

事一こと

223 かなしとも又哀とも世のつねにいふへき 哀一あはれ

ことにあらはこそあらめ

儲も実になからふる世のならひ心う

儲一さて
実一けに

くあげぬくれぬとしつゝさすかにう

つし心もましり物をとかくおもひ

つゝくるまゝに悲しさもなをまさる

悲しさ一かなしさ

心ちすはかなく哀なりける契のほと

心ち一心地
哀一あはれ

も我身ひとつのことにはあらずをな

しゆかりのゆめみる人はしるもしら

ぬもさすか「おほくこそなれとさし

六七オ

あたりてためしなくのみおほゆむか

しも今もたゝのとかなるかきりある

わかれこそあれかくうき事はいつか

はありけるとのみおもふもさる事に

てたゝとかくさすかおもひなれにし

ことのみわすれかたさいかてく今

はわすれむとのみおもへとかなはぬ

かなしくて

224

ためしなきかゝるわかれになをとまる「面

面影一おもかけ

六七ウ

影はかり身にそふそうき

225

いかて今はかひなきことをなけかすて物

わすれするこゝろにもかな

226

わすれむとおもひても又たちかへりなこ

おもひ一思ひ

りなからんことそかなしき

たゝむねにせきなみたにあまるおも

ひのみなるもなにのかひそとかなし

くて後の世をはかならすおもひやれ 後一のち

といひし物をさこそそのきはも心あ

はたゝし「かりけめ又自残りて跡と

六八オ

自一おのつから
残り一のこり
跡とふ一あとゝふ

ふ人もさすかあるらめとよろつなあ

たりの人も世にしひかくろへて何 何事一なに事

事も道ひろからしなと身一のことに 道一みち

おもひなされてかなしければ思ひ 思ひ一おもひ

をゝこしてほうくゑりいたしてれう

しにすかせて経かき又さなからうた

せてもしのみゆるもかはゆければう

らに物をかくして手つからちさう六

たいすみか「きにかきこせなとさま

六八ウ

227

く心さしはかりとふらふも人め〇

つゝましければうとき人にはしらせ

す心ひとつにいとなむかなしきもな

をたえかたし

すくふなるちかひたのみてうつしおく

をかならすむつのみちしるへせよ

なとなくくおもひねんしてあせう

上人の御もとへ申つけてくやうせさ

せたてまつるさすかつもりにけるほ

うくなれば「おほくてにんせうたら

六九オ

になにくれさらぬこともおほくかゝ こと一事

せなとするに中くみしとおもへと

228

かなしきのいとゝもよほすみつつきにあ
もよほすーもよほす

つれなくおほゆ

事思ひ出らるるもなにの心ありてと
出らるるーいてらるゝ

ひなしとかや源氏の物かたりにある
物かたりー物語

なさやう六九ウにしたゝむるにみるもか

うにおほゆれはひとつものこさすみ

らいなにかとみゆるかかきかへすや

りしか無イりし我いひしことのあいし

えつゝいはんかたなしそのおりとあ

かゝるならひなるをめぐれ心もき

ともかゝらてたにむかしの跡は涙の
跡ーあと

さすかにみゆるふてのあとことの葉

230

ことゝはむなれもやものをおもふらんも
おもふらんーおもふらむ

すもともなる心ちして

木すゑにかしかましきまでなきくら

かきくらさるゝにひくらしはしけき

ゆる世のけしきにも我袖ひめやと又

やうにてま七〇オとにつちさへさけてみ

たけの「葉はつよき日によられたる

とはたにのかたにて見おをろしたれば

夏ふかき比つねにいたるかたのやり

をなからふるたまのおをもうし

229

かはかりのおもひにたえてつれもなくな
つれなくーつれもなく

とは中くきえねとそおもふ

ろともになく夏のひくらし

なくさむ事もなきまゝにはほとけ

に「のみむかひたてまつるもさすか
トヨ

おさなくよりのたのみきこえしかとう おさなくーおさなく

き身思ひしることのみありて又かく 思ひーおもひ
又ーまた

ためしなき物をおもふもいかなるゆ

へそと神も仏もうらめしくさへなり

て

231 さりともとたのむほとけもめくまねは後

の世までをおもふかなしさ

232 ゆくゑなくわか身もさらはあくかれんあ

とくとむへきうき世ならぬに「セニオ

きた山の辺によしある所のありしを

はかなくなりし人のりやうする所に

て花のさかり秋の野辺など見にはつ

ねにかよひしかはたれもみしおりも

ありしをあるひしりの物になりてと

きゝしをゆかりある事有しかはせめ 有ーあり

てのことにしのひてわたりてみれば

おもかけはさきたちて又かきくらさ

るゝさまそいふかたなきみかきつく

ろはれし「庭もあさちかはらよもき
セニ

かそまになりてむくらもこけもしけ

りつゝありしけしきにもあらぬにう

へしこはきはしけりあひてきたみな

みの中にはみたれふしたりふちはか

まうちかほりひと村すゝきも実まじとにむ 実―まと

しのねしけきのへとみえしにくるま のへ―野へ

よせておりしつまとのもとにてたゝ

ひとりなかむる〇にさまくおもひ出 ながむる―ながむるに
出る―いつる

ることなどいふも中く世セニヤれいの

物もおほえぬやうにかきみたる心の

うちなから

233 露きえし跡は野原となりはてゝありしに 跡―あと

もにすあれはてにけり

234 あとをたにかたみにみんなとおもひしをさ

てしめいとゝかなしさそゝふ

東のにはに柳さくらのをおなしたけな

るをませてあまたうへならへたりし

をひとゝせの春もろともに見セニヤしこ 見―み

ともたゝ今の心ちするに木すゑはか

りはさなからあるも心うくかなしく

て

235 うへてみし人はかれぬるあとになをのこ

るこすゑをみるも露けし

236 我身もしはるまであらはたつねみんな みんな―みむ

もその世のことなわすれそ

また物へまかりし道にむかしのあと 道―みち

のけふりになりしかいしすゑはかり

のこりたるに草ふかくて秋の花とこ

ろ七三オにさきいてゝ露うちこほれ

つゝ虫のこゑくみたれあひてきこ 虫一むし

ゆるもかなしく行過へき心ちもせね 行過一ゆきすく

はしはし車をとめてみるもいつを 車一くるま

かきりにかとおほえて

237 またさらにうきふるさとかへりみて心

とむることもはかなし

たをおなしことをのみはるゝ世もな

くおもひつゝたえぬ命はさすかにあ

り七三ウふるにうきことのみ聞かさねぬ 聞一き

るさまいふかたなし

238 さためなき世とはいへともかくはかりう

きためしこそ又なかりけれ

女院大原におはしますとはかりは

きまいらすれとさるへき人にしら

れては参るへきやうもなかりしをふ 参る一まいる

かき心をしるへにてわりなくてたつ

ねまいるにやうくちかつくまゝに

山みちのけしきよ七四オりまつなみたは

さきたちていふかたなきに御いほり

のさま御すまひことからすへてめも

あてられすむかしの御有様みまいら 有様一ありさま

みまいらせさらんみまい
らせさらむ

せさらんたにおほかたのことからい こと一事

かゝこともなのめならんまして夢う

つゝともいふかたなし秋ふかき山を^お

ろしちかき木すゑにひゝきあひてか

けひの水のおとつれ鹿のこゑむしの^き

ねいつくものことなれとためしなき

か^{七四ッ}「なしきなりみやこははるのにし

きをたちかさねてさふらひし人く

六十余人ありしかとみわするゝさま 余一よ

におとろへたるすみそめのすかたし

てわつかに三四人はかりそさむらは さむらは一さふらは

るゝその人くにもさてもやと計そ 計一はかり

われも人もいひ出たりしむせふなみ 出いて

たにおほゝれてこともつゝけられす

239 今や夢むかしやゆめとまよはれて「いか^{七五オ}

におもへとうつゝとそなき

240 あふきみしむかしの雲のうへの月かゝる

みやまのかけそかなしき

花のにほひ月の光りにたとへてもひ 光り一ひかり

とかたにはあかさりし御面影あらぬ 面影一おもかけ

かとのみたとらるゝにかゝる御事を

みなからなにおもひてなきみやこ

へとてされはなにとてかへるらんと

うとましく心うし^{七五ウ}

241 山ふかくとゝめおきつるわかこゝろやか

てすむへきしるへとをなれ

なに事につけても世にたゝなくもや

ならはやとのみおほえて

242 なけきわひわかいかなからましとおもふまで

の身無そわれなからかなしかりける

なくさむことはいかにしてかあらん

なれはあらぬ所たつねかてらとをく

おもひたつ事ありしにもまつおもひ

いつること「ありて

七六オ

243 かへるへきみちは心にまかせてもたひた

つほとはなをあはれなり

244 みやこをはいとひても又なこりあるをま

してと物をおもひいてつる

心さしの所は比叡坂本のわたりなり 比叡坂本一ひるさかもと

雪はかきくらしふりたるにみやこは

春はるかにへたゝりぬる心ちしてなにの思 春一はる

ひいてにかと心ほそし夜ふくる」ほ 七六ウ

とにかりの一つらこのるたるうへを

すくるおをとのするもまつあはれとの

みきゝてすゝろにしほくとそなか

るゝ

245 うきことはところからかとのかるれとい

つくもかりのやとゝまこゆる

せきひとつこそこえぬるはいくほと

なたをらしこすゑにひくぐあらしのおをと

も宮こよりはことのほかにはけしき

に

246 せきこえていく雲井までへたてねと「み

七七オ

やこにはにぬ山おをろしかな

つくくとおをこなひてたゝ一すちに

みし人の後の世とのみいのらるゝに

も猶かひなきことのみおもはしとて

も又いか無イはそともをたち出してみれ 出てーいてゝ

はたちはなの木に雪のイふかくつもり

たるをみるにもいへつのとしとや大内 いへーいつ

にて雪のいとたかく積りたりしあし 積りーつもり

たとのひすかたのないはめるなをし

にてこの木に「ふりか七七りたりし雪

をさなからおりてもちたりしをなと

それをしもおられけるにかと申しか

はわかたちならすかたの木なれは契

なつかしくてといひをしおりたゝ今と

おほえてかなしきことそいふかたな

き

247 たちなれしみかきのうちのたち花もゆき

ときえにし人やこふらん

こふらんーこふらむ

とまつおもひやらるゝこのみる木は

葉のみしけりて色もさひし
七八オ

248 ことゝはむさつきならでもたち花にむか

しの袖のかはのこるやと

風にしたかひてなるこのおとのする

もす^すそろに物かなし

249 ありし世にあらすなるこのおとき^をけはす

きにしことそいとゝかなしき

はるかにみやこの方をなかむれはは

るく^とへたゝりたる雲井にも」
七八ウ

250 我心うきたるまゝになかむれはいつくを

雲のはてとしもなし」

十二月ついたちころなりしやのん夜

に入てあめとも雪ともなくうちゝり

てむら雲さわ^はかしくひとへにくもり さわかしくさ^はかしく

はてぬ物からむらくほしうちきえ^ら

したりひきかつきふしたるきぬをふ

けぬるほとうし二はかりにやとおも

ふほとにひきのけてそらを見あけた

れは殊に」はれてあま^き色なるにひ 殊に一ことに
七九オ

かりことくしきほしのおほきなる

むらなくいてたるなのめならすおも

しろくてはなのかみにはくをうちゝ

らしたるにようにたりこよひはしめ

てみ^そすめたる心ちすさきくもほし みすめみそめ

月夜みなれたることなれとこれはお

りからにやことなる心ちするにつけ

てもたゝ物のみおほゆ「七九ウ」

251 月をこそ詠なれしかほしの夜のふかきあ 詠一なかめ

はれをこよひしりぬる

日よしへまいるに雪はかきくらしこ

しのまへいたにこちたく積りてつや 積り一つもり

したるあけほのにやとへ出るみちす 出る一いつる

からすたれをあげたれは袖にもふと

ころにもよこ雪にて入てそてのうへ

ははらへともやかてむらゝこほる

おもしろきにもみせはやとおもふ人

のなきあはれなり「八〇オ」

252 なにことをいのりかすへき我袖のこほり

はとけんかたもあらしを

いたく心ほそきたひのすまるにとも

まつ雪きえやらてかつゝあまぎる

空をなかめつゝ

空一そら

253 さらにたにふりにしことのかなしきに雪

かきくらす空もなかめし

空一そら

よもすからなかむるにかきくもり又

はれのき^ひひとかたならぬ雲のけしき

にも「八〇ウ」

254 おほそらははれもくもりもさためなきを

身のうきことはいつもかはらし

そともなるこのおとなひもさひし

きそふ心ちしておほかたのよものこ
さひしきさひしき

する野辺のけしきとしのくれなは

みなかれのにてふきはらひたりなに

となきなこりなき世のけしきもおも

ひよそへらるゝことおほし

255

秋すきてなるこは風にのこりけりハ一オなに

のなこりも人のよそなき

わつかなるたにかはのこほりはむせ

ひなからさすか心ほそきおとはたへ

くきこゆるにおもふことのみあり

て

256

たにかはゝこの葉とちませこほれともし

たにはたえぬ水のおとかな

また夜をこめて宮このうちへいへる
いへるいへる

みちはしかの浦なるに入江にこほり

しつゝよをかくるなみのかへらぬ心

ちしてハ一ウうす雪つもりてみわたした

れはしろたえなり

257

うらやまし志賀のうらはのこほりとちか

へらぬなみも又かへりなむ

海のおもてはふかみとりくろくと

をそろしけにあれたるにほとなきみ

258

わたしむかひにうるはしきふなちに

て空はあなたのはたにひとつにて雲 空一そら

路にこきゝゆるおふねのよそめにな

み風の「あらくなつかしからぬけし

八二オ

きにて木草もなきはまへにたへかた

く風はつよきにいかにそなみに入に

し人のかゝるわたりにあるとおもひ おもひ一思ひ

のほかにきゝたらいいかにすみうき

わたりなりともとゝまりこそせめな

ときへあんせ^せられて

こひしのふ人にあふみのうみならはあら

きなみにもたちましまし

259

むつきのなかはすくるところとなに

とな「くはるのけしきうらく」とか

八二エ

すみわたりたるに高倉院の中納言の

すけときこえし人いまのうちにさふ

らはるゝかあはんとありしかはむか

しの事しれる人もなつかしくてその

日をまつ程にさしあふ事ありてとゝ

まりぬこよひにてあらましとおもふ

夜あれたるいへのきはより月さし

入てむめかほりつゝ^{えん}みんなりなかめ

入一いり
みん一えん

あかしてつとめて申やる「八三オ

あはれいかにけさはなこりをななめまし

きのふの暮のまことなりせば

きのふー昨日
暮ーくれ

かへし

260 おもへたゝさそあらしのなこりさへき

のふもけふもありあけの空

空ーそら

ことなる事なき物かたりを人のする

におもひ出らるゝことありてそゝろ 出ーいて

になみたのこほれそめてとゝめかた

くなかるれは「ハミウ」

261 うきことのいつもそふ身はなにとしもお

もひあへてもなみたおちけり

二月十五日ねはんゑとて人のまいり

しにさそはれてまいりぬおこなひう

ちしておもひつゝくれは尺迦仏の入

滅せさせ給けんおりの事そうなどの

かたるを聞にもなにもたゝ物のあは 聞ーきく

れのことにおほえて涙とゝめかたく

おほゆるもさほと事はいつもきゝ

しかと「この比聞はいたくしみく 聞ーきく
八四オ

とおほえてものかなしく涙のとまら 涙ーなみた

ぬもなからふましきわか世の程にや

とそれはなけかしからすおほゆ

262 世の中のつねなきことのためしとてそら

かくれにし月にそ有ける 有ーあり

いむふく門院皇后宮と申し比その御

かたにさふらふ上らうのしるよしあ

りてきこえかはししかゆきあひて

ひ「くらし物かたりしてかへり給ぬ
八四ウ

る名残あめうちふりて物あわれなり
名残—なこり
あわれなり—あはれ也

この人もことに我おなしすちなる事
事—こと

をおもふ人なり○なつかしくもあり
しかば

さま／＼それも恋しくおもひいてら

れて申やる

263
いかにせん^せなかめかねぬるなこりかなさ

らぬたにこそあめのゆふくれ

かへし「八五オ

264
なかめわふるあめのゆふへにあはれまた
また—又

ふりにしことをいひあはせはや

四月廿三日あけはなる程あめすこ

しふりたるに東のかた空にほと／＼き
空—そら

すのはつねなきわたるめつらしくも

あはれにもきくにも

265
あけかたにはつねき／＼つるほと／＼きすし

ての山ちのことをとは／＼や

266
あは^らすなる浮世のはてにほと／＼きす「い
八五ウ 浮—うき

かてなくねのかはらさるらん
さるらん—さるらむ

五月二日はむかしの母のき□^目也心

ちなやましかりしかと手なとあらひ

て念仏申経よむ法師よひて経よませ

て聴聞するにも又こむとしのいとな 聴聞―ちやうもん

みはえ^えせぬこともやとおもふにもさ

すかあはれにて袖も又ぬれぬ

267 わかれにしとし月日にはあふこともこれ

はかりやとおもふかなしさ^{ハハネ}

やよひの井日あまりの比はかなかり

し人の水のあはとなりける日なれば

れいの心ひとつにとかくおもひいと

なむにも我なからんのちたれかこれ

ほども思ひやらんかく思ひしことゝ 思ひ―おもひ

ておもひいつへき人もなきかたえか^ハ

たくかなしくてしくくとなくより

ほかの事そなき我身のなくならんこ なくならん―なくならむ

とよりもこれかおほゆるに^{ハハウ}

へこの間欠脱あり

3

おもひこそやれあまのはころも

283 哀とやおもひもするとたなはたに身のな 哀―あはれ

けきをもうれへつるかな

284 七夕のいはのまくらはこよひこそなみた

かゝらぬたもとなるらめ

285 幾たひかゆきかへるらんたなはたのくれ 幾たひ―いくたひ
かへるらん―かへるらむ

いそくまのこゝろつかひは

286 ひこほしのあひみるけふはなにゆえにと^ハ

りのわたらぬ水むすふらん^{ハセオ}

むすふらん―むすふらむ

287

哀とやたなはたつめもおもふらんあふせ

哀—あはれ
おもふらん—おもふらむ

もまたぬ身のちきりはは

288

たなはたにけふやかすらん野辺ことにみ

たれおるなるむじのころもゝ

289

いとふらん心もしらすたなはたになみた

いとふらん—いとふらむ

の袖を人なみにかす

290

何事をまつかたならむひこほしのあまの

かはらにいはまくらして

291

七夕のあかぬわかれのなみたにや「ハセツ

七夕—たなばた

〈この間欠脱あり〉

4

心のうちをおもひこそやれ

301

よひのまに入にし月のかけまでもあかぬ

心やふかきたなはた

302

たなはたの契なけきし身のはてはあふせ

をよそにきゝわたりつゝ

303

なかむれは心もつきてほしあひのそらに

みちぬる我おもひかな

304

露けきは秋の野辺にもまさるらしたちわ

かれゆくあまのはころも「ハハオ

あま—あまの

305

ひこほしのおもふ心は夜ふかくていかに 夜—よ

あけぬるあまのとならん

ならん—ならむ

306

七夕のあひみるよひの秋風に物おもふ袖

七夕—たなはた

秋—あき

のつゆはらはなん

307

秋ことにわかれし比と思ひ出る心のうち

比—ころ
思ひ—おもひ
出る—いつる

をほしはみるらん

308 七夕に心はかしてなけくともかゝるおも

ひをえしもかたらぬ

309 世中はみしにもあらすなりぬるに「おも

八八ウ

かはりせぬほしあひのそら

310 かさねてもなをや露けきほともなく袖わ 露一つゆ

かるへきあまのはころも

311 おもふことかけとつきせぬかちの葉にけ

ふにあひぬるゆへをしらはや

312 よしかさしかゝるうき身の衣手はたなは

たつめにいまれもそする

313 かたはかりかきてたむ うたかたを ーくる

ふたつのほしのいか らん」八九オ ーみる
らんーらむ

314 なにとなく夜半の れに袖ぬれてな ーあは

かめそかぬるほし のそら ーあひ

315 えそしらぬしのふゆへなきひこほしのま

れに契てなけくころを

316 なけきてもあふせをたのむあまのかはこ

のわたりこそかなしかりけれ

317 かきつけはなをもつゝましおもひなけく おもひー思ひ

心のうちをほしよしらなん

318 ひくいとのたゝ一すちにこひくくて「こ 八九ウ

よひあふせもうらやまれつゝ

319 たくひなきなけきにしつむ人そとてこの

ことの葉をほしやいとはん

320

よしやまたなくさめかはせたなはたよ

かゝるおもひにまよふこゝろを

《一行分あき》

このたひはかりやとのみおもひても

又かすつもれは

321

いつまでか七のうたをかきつけんし九〇オら

はやつけよあまのひこほし

わかゝりし起ほとより身をよくなき物 起一程

におもひとりにしかはたゝ心よりほ

かの命のあらるゝたにもいとほしき

にまして人にしらるへきことはかけ

てもおもはさりしをさるへき人く

さりかたくいひはからふことありて

おもひのほかにとしへてのち又こゝ

のへの中をみし身のちきり返くさ

ためなく九〇ウ

《この間欠脱あり》

5

322

今はたゝしゐてわするゝいにしへをおも

ひいてよとすめる月かけ

五せちの比霜夜のありあけに宮の御

かたのゑんすいにてしらすやうな

どこのゑきこゆるにもとしくきゝ

なれし事まつおほえさらんや

323

霜さゆるしらうすやうのこゑきけはあり

し雲井そまつおほえける

とにかくに物のみおもひつゝけられ

て「九一オ」みいたしたるにまたらなるいぬ

のたけのたいのもととしありくか

むかしうちの御かたにありしか御つ

かひなどにまいりたるおりくよひ

て袖うちきせなとせしかはみしりて

なれむつれおキはたらかしなとせし

にいとようおほえたにもすヨイろにあ

一六校注者ノ挿入ノ注記カ

はれなり

あはれなり―あはれ也

324

いぬはなをすかたもみしにかよひけり「人

九一ウ

み―見

のけしきそありしにもにぬ

その世の事みし人しりたるもおキのつ

からありもやすらめとかたらふよし

もなしたシゝ心の中はかりおもひつゝ

けらるゝかはるゝかたなくかなしく

て

325

我おもふ心にゝたる友もかなそよやとた

友も―ともゝ

にもかたりあはせん

五月五日さうふのみこしたてたるみ

はしのあたりの木キのけしきもみし

に「もかはらぬにも

九二オ

326

あやめふくのきはもみしにかはらぬをう

きねのかゝる袖そかなしき

329 うかりける夢の契の身をさらてさむるよ

人のうれへ申しことのあるをさるへ

もなきなけきのみする

きひとの申さたするをきけは後白河

たかふさの中納言のなけく事ありて

院の御時おほせくたされけるなとゝ

こもりゐたるもとへこれはかりはむ むかし一昔

てこのさめやらぬ夢とおもふ人の蔵

かし」のこともをのつからいひなと 九三才

人の頭にてかきたりけるとてその名

する人なれはとふらひ申とて五月五

をきくにいかゝあはれのこともな

日に

の「めならん 九二才

む なめならんーなめなら

330 つきもせぬうきねは袖にかけなからよそ せ

327 水のあはときえにし人の名はかりをさす

のなみたをおもひやる哉 哉一かな

かにとめてきくもかなしき

返し

返し一かへし

328 おもかけもその名もさらはきえもせて

331 かけなからうきねにつけておもひやれあ る、イ かけなから一かけなにゝ

きゝみることにこゝろまとはす

やめもしらすくらすこゝろを

大宮の入道内大臣うせられたりし比

公経の中納言かきこもりて五せちな

九三ウ

とにもまいられさりしにしろいうすや

うのいろくくのくしをかきたるにか

きて人のつかはしゝにかはりて

つかはしゝゝつかはしし

332 まよふらん心のやみをおもふかなとよの

あかりのさやかなるころ

返し無うすにひのうすやうにイ

返しゝかへし
うすにひのうすやうに九
大本ナシ

333 かきこもるやみもよそにそなりぬへきと

よのあかりにほのめかされて

ちかむねの中納言うせてのちむか

しはもちかくみし人にてあわれなれ

九四オ

はちかなかのもとへ九月のつくるこ

ろ申やるそらのけしきもうちしくれ

てさまくあはれもことにしのひか

たければいろなる人のそてのうへも そてゝ袖

をしはかられて

334 くらきあめのまとうつおをとに寢覚して人 寢覚ゝねさめ

のおもひとおもひこそやれ おもひとゝおもひを

335 露けさのなけくすかたにまよふらんは まよふらんゝまよふらむ

九四ウ

なのうへまでおもひこそやれ

336 露きえし庭の草葉はうらかれてしけきな 露ゝつゆ

けきを思ひこそやれ

337 わひしらにましらたになく夜の雨に人の

こゝろをおもひこそやれ

338 君かことなけきくのはてくはうちな

かめつゝおもひこそやれ

339 またもこん秋のくれをはをしましなかへ

らぬみちのわかれたにこそ九五オ

返し

無 ちかなかイ

340 板ひさし時雨はかりはおとつれて人めま 板ひさしをいたひさし

れなるやとそかなしき

341 植おきしぬしはかれつゝいろくの花さ 植をうへ

へちるをみるそかなしき

342 はれまなきうれへの雲にいつとなくなみ

たの雨のふるそかなしき

雨一あめ

秋無のにはらはぬやとにあとたえてこけ この歌九大本ニナシ

のみふかくなるそかなしきイ

343 よもすからなけきあかせはあか月にまし

の一こゑきくそかなしき九五ウ

344 くちなしの花色衣ぬきかへてふちのたも

とになるそかなしき

345 おもふらんよそはのなけきもある物をとふ おもふらんおもふらむ

ことの葉をみるそかなしき

346 くれぬとも又もあふへき秋にたに人のわ

かれをなすよしもかな

九月十三夜ことはりのま一にはれた

りしにちかなかの物のさたなとひま

なくしてうちあけたるけしきもなく

「てきとひきそはめはかなき物の九六オは

しにかきてわかき人く大はんとこ

ろにありし中をかきわけくうしろ

のかたによりてふところより取り取り

てゝたひたりし

347 なにしほふよをなか月のとをかあまりき

みみよとてや月もさやけき

返しこれもものゝはしに

返しーかへし
これもものゝはしにー九六
本ナシ

348 なにだかきよをなか月のつきはよし九六ウ

き身にみえは曇もそする

曇ーくもり

道宗の宰相中将のつねに参りて女官

道宗ーみちむね
参るーまいり

なとたつぬるもはるかにゑしもふと

まいらすつねに女房にけさんせまほ

しきいかゝすへきといはれしかはこ

のみすのまへにてうちしはふかせた

まはゝきゝつけんするよし申せはま

ことしからすといはるは唯こゝも唯ーたゝ

とにたちたさらてよるひ九七オるさふらふ

そといひてのちつゆもまたひぬほと

にまいりてたゝれにけりときけはめ

しつきしていつくへもおおひつけとて

はしらかす

349 おきの葉にあらぬ身なれはおをともせせてみ おきー口き

るをも見ぬとおもふなるへし

見—み

久我へいかれにけるをやかて尋てふ 尋—たつね

みはさしおきてかへりけるにさふら

ひしておはせけれとあなかしこ返

し」とるなどをしへたれば鳥羽殿の 鳥羽殿の—とはとの、
九七ウ

南のもんまでおいけれとむはらから 南—みなみ

たちにかゝりてやふににけてちから

くるまのありけるにまきれぬるとい

へはよしとてありしのちさるふみみ

すとあらかひ又まいりたりしかと人

もなきみすのうちはしるかりしかは

たちにきといへは又ははたらかてみし

かとあまり物さはかしくこそたちた

まひ」にしかなといひしろひつゝ五
九八オ

せちのほとにもなりぬそのゝちもこ

の事をのみいひあらそふ人々あるに タ—く

とよのあかりのせちゑの夜さへかへ

りたるありあけにまいられたりしけ

しきいふなりしをほとなくはかなく

なられにしあわれさあえなくでその かわれ—あはれ

夜のありあけくものけしきまでかた

みなるよし人くつねに申し」九八ウ

〈この間欠脱あり〉

6

いらせたりし

354

なからへて今朝そうれしきおいのなみ八
千世をかけて君につかえん

なからへー口からへ
今朝ーけさ
八千世ー□ちよ

とありしか給たらん人の歌にては今

すこしよかりぬへく心のうちにお

ほえしかともそのまゝにおくへき事
事ーこと

なれはおきてしをけさそのもしつか

えんのむもしをやとよになるへか

りけるとてにはかにその夜になり

九九オ

て二条とのへまいるへきよしおほせ

事とてのりみつの中納言の車とてあ

れはまいりて文字二おきなをしてや

かて賀もゆかしくてよもすからさふ

355

らひてみしにむかしのことおほえて

いみしくみちのめんほくなのめなら

すおほえしかはつとめて入道のもと

へそのよし申つかはず
九九ウ

君そなをけふより後もかそふへきこと
ことー□

かへりのとをの行すゑ
行すゑーゆくすゑ

返事にかたしけなきめしに候へはは

うくまいりて人めいかはかりみく
みくなくーみるしく

なしくとおもひしにかやうにあつむ
カ 7 △ハ校注者欠脱ノ注記

る事ありとて書をきたる物やとたつ
事ーこと

ねられたるたにも人かすにおもひ出
書をきーかきおき

ていはれたるなさけありかたくおほ
出ーいて

ゆるにいつれの名をとかおもふ
憶とはれたる―おもふと、
はれたる

と」^{一〇〇キ}はれたるおもひやりのいみじ

うおほえてなをたゝへたてはてにし

むかしのことのわすられかたければ

その世のまゝになと申とて

358 ことの葉のもし世にちらはしのはしきむ

かしのなこそとめまほしけれ

返し 民部卿定家

返し―かへし
民部卿定家―民部卿

359 を^おなしくは心とめけるいにしへのその名

をさらに世にのこさなん」^{一〇〇キ}

とありしなん嬉しくおほえし」^{一〇一キ}
嬉しく―うれしく

本云

建礼門院右京大夫集也

此本自筆なりけるを七条院大納言

さりかたきゆかりにて此さうしをみせ 比―この

られたりけるをうつされたとなん

承明門院小宰相本以正元二年二月 承明門院小宰相本以―以承

明門院小宰相本

二日書写畢」^{一〇一ツ}

付記

資料の閲覧、翻刻について種々のご配慮をいただいた今山八幡宮に対
し、厚く御礼申し上げます。

(平成元年九月三〇日受理)